

西部開発事業（畑地帯総合土地改良事業）

—緊急発掘調査報告—

金 銄 場 遺 跡

1979

伊那市教育委員会

西部開発事業（畠地帶総合土地改良事業）

—緊急発掘調査報告—

金 鑄 場 遺 跡

1979

伊那市教育委員会



第3号住居址出土



第3号住居址出土



第3号住居址



第3号住居址

第3号住居址

第1号住居址

第1号住居址

第1号住居址

第3号住居址

第1号住居址

第1号住居址

第3号住居址

序

昭和53年度西部開発事業（西箕輪地区）の一環として、伊那市西箕輪羽広金鉄場遺跡の発掘調査が行われました。

この西箕輪は、木曾山脈の北部経ヶ岳山麓より広がる扇状地上の扇頂部附近に位置し、発掘当初より、西麓の仲仙寺及び御射山社との関係で、重要視の度合いが大きかった。当地区は開発の遅れ等で、今までに発掘調査をされた遺跡は、ほんの数例でしかなかったが、そのうちでも、今回の調査はその成果で最も活気的なものとなつた。特に前述した通り、仲仙寺及び御射山社との関連が考古学的見地からある程度のメスが入れられた。

次に、遺跡の成果を簡単に述べてみたいと思う。発掘調査地域が限られていたので、全面的な調査ができなかつた。遺構としては平安時代の竪穴住居址10軒、出土遺物としては、土師器、須恵器、灰釉陶器、綠釉陶器、鐵器類の出土をみた。

報告書刊行に当つて、この発掘調査の実施に深いご理解をいただいた南信土地改良事務所職員一同、この調査に御協力いただいた地元作業員、関係各位に対し、深甚な謝意を表する次第であります。

昭和54年3月8日

伊那市教育委員会

教育長 伊沢 一雄

凡　例

- 1 今回の発掘調査は西部開発に伴なう、県営畠地帯総合土地改良事業で、第6次緊急発掘調査にもとづく報告書とする。
- 2 この調査は、県営畠地帯総合土地改良事業に伴なう緊急発掘で、国、県、市の補助金のもとに事業は長野県南信土地改良事務所の委託により、伊那市教育委員会が実施した。
- 3 本調査は、昭和53年度中に業務を終了する義務があるため、報告書は図版を主体とし文章記述もできるだけ簡略にし、資料の再検討は、後日の機会にゆずることにした。
- 4 本文執筆者は、次のとおりである。担当した項目の末尾に氏名を記した。

飯塚政美、畠畠辰雄

◎図版作製者

○遺構および地形

友野良一、飯塚政美、畠畠辰雄

◎写真撮影

○発掘・遺構及び遺物

友野良一、飯塚政美、畠畠辰雄

- 5 本報告書の編集は主として、伊那市教育委員会があたった。

目 次

序

凡 例

目 次

挿図目次

図版目次

第Ⅰ章 遺跡の環境 (1~5)

第1節 位 置 (1)

第2節 地形・地質 (1)

第3節 歴史的環境 (2~5)

第Ⅱ章 発掘調査の経過 (6 ~10)

第1節 発掘調査の経緯 (6)

第2節 調査の組織 (6)

第3節 発掘日誌 (7 ~10)

第Ⅲ章 遺 墓 (11~25)

第1節 住居址 (13~25)

第Ⅳ章 遺 物 (25~29)

第1節 住居址内出土遺物 (25~28)

第1項 第1号住居址 (25~26)

第2項 第2号住居址 (26)

第3項 第3号住居址 (26~27)

第4項 第5・6号住居址 (27)

第5項 第8号住居址 (27)

第6項 第9号住居址 (28)

第2節 緑釉陶器 (28~29)

第Ⅴ章 まとめ (30~31)

挿 図 目 次

第1図	西箕輪地区遺跡分布図	(3)
第2図	地形図	(5)
第3図	遺構配置図	(11)
第4図	第1号住居址実測図	(13)
第5図	第2号住居址実測図	(14)
第6図	第3号住居址実測図	(15)
第7図	第3号住居址カマド実測図	(16)
第8図	第4号住居址実測図	(16)
第9図	第4号住居址カマド実測図	(17)
第10図	第5・11・12・13号住居址実測図	(18)
第11図	第6号住居址実測図	(19)
第12図	第7号住居址実測図	(20)
第13図	第7号住居址カマド実測図	(21)
第14図	第8号住居址実測図	(22)
第15図	第8号住居址カマド実測図	(23)
第16図	第9号住居址実測図	(24)
第17図	第10号住居址実測図	(25)
第18図	第1号住居址出土遺物実測図	(26)
第19図	第2号住居址出土遺物実測図	(26)
第20図	第3号住居址出土遺物実測図	(27)
第21図	第5・6号住居址出土遺物実測図	(27)
第22図	第8号住居址出土遺物実測図	(27)
第23図	第9号住居址出土遺物実測図	(28)
第24図	綠釉陶器実測図	(29)

表 目 次

第1表	西箕輪地区遺跡一覧表	(4)
-----	------------	-----

圖 版 目 次

第1図版	遺跡全景
第2図版	遺構配置
第3図版	遺構
第4図版	遺構
第5図版	遺構
第6図版	遺構
第7図版	遺構
第8図版	遺構
第9図版	遺構
第10図版	遺構
第11図版	遺構
第12図版	遺物出土状況
第13図版	遺物出土状況
第14図版	遺物出土状況
第15図版	遺物出土状況
第16図版	遺物出土状況

第Ⅰ章 遺跡の環境

第1節 位 置

金鉢場遺跡は長野県伊那市大字西箕輪羽広に、また、蔵麓山や経ヶ岳山麓より東へ押し出した山麓扇状地の扇頂部に位置している。遺跡地の現況は畑作であり、押し出しの土砂の堆積がローム層の上に厚く覆っていた。

金鉢場遺跡に至るまでの経路は二つの場合が考えられる。まず一つとして、国鉄飯田線伊那市駅を下車して、北へ向って国道153号線を約4.5km程行って、北殿駅付近で、西へ4km程行くと大泉新田に到着する。さらに西方1km程行くと吹上に出る。ここで左に折れて大泉川を渡り、南へ4km程行くと羽広に着く。羽広の南、羽広莊といふ保養所の東側一帯が遺跡地である。もう一つの経路としては伊那市街より西へ向って、大萱、荒井線を約3km程廻ると信州大学農学部の白い校舎が目に映える。さらに1km程登ると、西箕輪中学校に達し、ここから与地、辰野線を北へ約1.5km行くと羽広区の集落が点在している。遺跡地は羽広の南に位置している。

第2節 地形・地質

西箕輪は、如何なる地形、ならびに地質に位置するかを考えてみると、伊那市においては最も眺望の優れた場所に属していると思われる。西箕輪の支所附近にて、パノラマ状に視野を展開してみると次のようになる。東方にひときわけわしく聳える赤石山脈の主峰の一つである仙丈ヶ岳、駒ヶ岳（甲斐駒ヶ岳）があり、その前方に南北に走る伊那山脈が通じてこれらの山脈の間を三峰川が流れ、最後に、天竜川と合流するのである。天竜川については各種の文献等で詳細に述べられているので、今回省略しておくことにしておこう。

西側に目を転じてみれば、南北に連なる山脈の一帯が存在し、その主峰は木曾郡と上伊那郡との境界線である経ヶ岳である。この麓は、次第に東南に傾斜して、天竜川河域に至って東の方側に、高遠、手良、箕輪等のそれと合致する。

西南の方角に高くみえるのが、駒ヶ岳の前方の将碁頭である。この山の右の傾斜と、経ヶ岳の左の傾斜の合わせる低い地点が権兵衛峠であり、ここは民謡『伊那節』の筋にみられる。駒ヶ岳の山麓に展開している集落が、横山、内の萱、大坊、平沢、小沢である。権兵衛峠付近より流出する水を集めて、小河川を成しており、これが小沢川で、東流して天竜川と合流して太平洋に注ぐ。

次に西箕輪地区内に限定した地形ならびに地質については、明治35年7月20日発行、長野県上伊那郡西箕輪村尋常小学校長、小林茂理編（わが郷土）を全面的に引用させてもらうこととした。それによると、『細かに観察すれば、自ら三個の大区域に分けて居る。

(1) を大泉所傾斜地、(2) を藏鹿傾斜地、(3) を御射山傾斜地と名を付けようと思う。一体、山は遠方より見れば、摺鉢でもふせたかのように、その傾斜がすらりと削り成したように見ゆれど

第1章 遺跡の環境

も、近きて之えを見れば、実はなかなかさようではない。いくつかの谷が峯に集り、ひだをなして出来て居る。吾が経ケ岳も、失張其通りである。我が学校に面したる谷のつまりは、経ケ岳の内、字藏鹿の嶺で、この傾斜の広がりたる区域は、羽広、大萱の両部落を載せもって、東南に走り、南箕輪村と伊那町につづき、遂に天竜河域に至り、高遠方面の西方に走れる傾斜に合して居る。これが即ち、藏鹿傾斜地である。また、藏鹿の西南に向へる谷、即ち字御射山の傾斜は、上戸、中条、与地の3部を載せつつ西南に走りたるも、南方駒ヶ岳の傾斜の北向する勢力に推され、茲に方向を東北に取り、藏鹿より東南向する傾斜と合し、更に東向して走りたるかのように思はる。之を御射山傾斜地と名けよ。一も一つ、藏鹿の嶺の北に於て、東北に開きたる大なる谷がある。これを大泉所と言う。この傾斜は、吹上、大泉新田、中曾根の三部を載せて、南、中の両箕輪に入り、天竜河域に至り、箕輪、東箕輪等の西向せる傾斜に出逢ふて居る。これが即ち大泉所傾斜地である。……そして、此大泉所の谷々より集り来る水は、時に或は暴漲して、急端直下、両岸を削り大砂を洗ひて、恰も蛟龍の渓谷を出でて、天竜と喰み合う如き猛勢を以て東奔するから、山麓にては、幅数百間、深さ數十丈の河原をなして居る。之を大泉川と言ふて、藏鹿傾斜と大泉所傾斜と合するあたりを、南北に中断して居る』

第3節 歴史的環境

西箕輪地区は経ケ岳山麓、標高760m位から1,000m附近までにわたって各時代の遺跡が分布しているが、その標高差による時代的な差違は顕著ではない。また、分布地域が、遺跡分布図を参考にすれば一目瞭然であるが、大体4カ所に分類できる。

①～⑤は大泉川周辺、⑥～⑦は大清水川、⑧～⑪、⑫～⑬は山麓扇状地上、⑭～⑯は無名の多くの沢が入っている場所等であり、いずれにしろ、水利の便の良好な場所に集中していることを疑う余地は全くない状態であります。遺跡分布の内訳は旧石器時代3、縄文中期時代25、縄文後期時代4、縄文晚期時代1、弥生後期時代2、土師器7、須恵器10、灰釉陶器4、中世2である。

（飯塚政美）

参考文献

長野県中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書（伊那市内その2）昭和48年度

上伊那誌（自然篇）

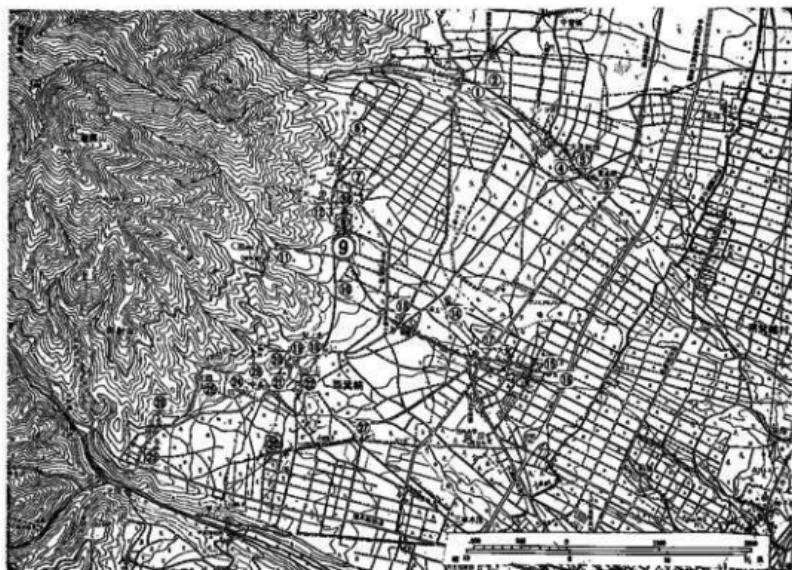
上伊那誌（歴史編）

塙畑遺跡（緊急発掘調査報告書）1976 伊那市教育委員会・関東農政局伊那西部農業水利事業所刊

中の原・古屋敷遺跡（緊急発掘調査報告書）1976 伊那市教育委員会・南信土地改良事務所刊
金鉛場・財木遺跡（緊急発掘調査報告書）1977 伊那市教育委員会・関東農政局伊那西部農業水利事業所刊

大萱遺跡（緊急発掘調査報告書）1975 伊那市教育委員会・南信土地改良事務所刊

与地原・北割遺跡1977 伊那市教育委員会・南信土地改良事務所刊



第1図 西箕輪地区遺跡分布図

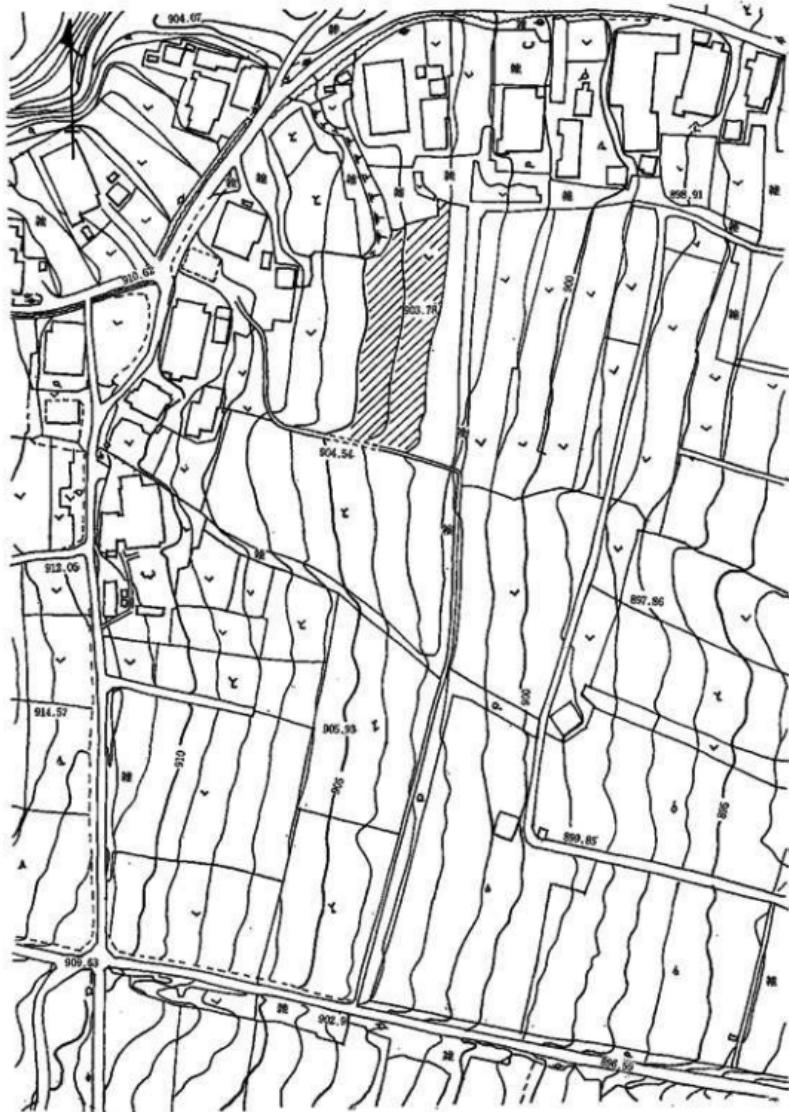
遺跡の名称

① 中道南	② 桜 烟	③ 久保田	④ 探 烟
⑤ 高 枝	⑥ 北 割	⑦ 田 代	⑧ 古屋敷
⑨ 金鑄場	⑩ 上 溝	⑪ 蔵鹿山麓	⑫ 經ヶ岳山麓
⑬ 西箕輪小学校北	⑭ 伊那義護学校	⑮ 熊野神社	⑯ 在 家
⑰ 大萱西	⑱ 殿屋敷	⑲ 宮垣外	⑳ 天庄 1
㉑ 天庄 2	㉒ 上 戸	㉓ 富士垣外	㉔ 堀 の 内
㉕ 小花岡	㉖ 中 の 原	㉗ 下 の 原	㉘ 与地山手
㉙ 与 地 原	㉚ 財 木		

第1章 遺跡の環境

第1表 西箕輪地区遺跡一覧表

No.	遺跡名	所在地	旧石器	縄文時代					弥生時代		古墳時代		奈良・平安時代		中世		備考 (長野県遺跡 地図番号)
				草	早	前	中	後	晚	前	中	後	土	須	土	須	
1	中道南	吹上				○											
2	桜畠	タ				○											
3	久保田	火泉新田				○								○			
4	塚畠	タ				○								○			
5	高根	タ				○											
6	北畠	羽広				○					○						(2602)
7	田代	タ				○											(2601)
8	古屋敷	タ				○					○						(2600)
9	金鉢場	タ				○							○	○	○		(2599)
10	上湧	タ					○	○					○	○	○	○	
11	藏鹿山麓	タ	○														
12	糸ヶ岳山麓	タ													○	和鏡	
13	西箕輪 小学校北	大董											○				
14	伊養護学校	タ 8274	○										○				
15	熊野神社	大董				○							○	○			(2678)
16	在家	タ 7438～ 7444外				○								○	○		(2679)
17	大董西	大董	○			○											
18	殿屋敷	梨ノ木				○							○	○			(2608)
19	宮垣外	中条				○	○						○	○	○		(2607)
20	天庄1	上戸				○							○	○			(2606)
21	天庄2	タ				○											
22	上戸	タ				○											
23	富士垣外	中条				○											
24	堀之内	タ				○											
25	小花岡	花岡				○	○						○	○			(2605)
26	中の原	中の原				○											
27	下の原	上戸				○											
28	与地山手	与地				○											
29	与地原	タ				○											(2609)
30	財木	羽広				○	○										



第2圖 地形圖 (1 : 1500)

第Ⅱ章 発掘調査の経過

第1節 発掘調査の経緯

西部開発事業（県営畠地帯総合土地改良事業）は伊那市竜西地区を区画整理する大規模な事業であります。当西箕輪地区は昭和49年度より実施され、昭和50年度に於いては中条地区で中の原遺跡、羽広地区で古屋敷遺跡、昭和51年度に於いては、羽広地区で北割遺跡、与地地区で与地原遺跡が発掘され、さらに昭和53年度では羽広地区的金鉢場遺跡が該当しました。

西部開発（県営畠地帯総合土地改良事業）の遺跡の調査を委託された場合は、受託されるよう県教育委員会より市教育委員会へ連絡があり、おって南信土地改良事務所より、緊急発掘調査について委託した旨、市教育委員会へ依頼を受けたので、市教育委員会を中心に、金鉢場遺跡発掘調査会を結成し、この中に調査団を含めて業務を遂行することとした。

第2節 調査の組織

金鉢場遺跡発掘調査会

調査委員会

委 員 長	伊 沢 一 雄	伊那市教育委員会教育長
副 委 員 長	福 沢 総一郎	伊那市文化財審議委員会委員長
委 員	赤 羽 映 土	伊那市教育委員長
ク	向 山 辻 雄	南信土地改良事務所長
調査事務局	竹 松 英 夫	伊那市教育委員会社会教育課長
ク	石 倉 俊 彦	ク
ク	有 賀 武	ク 課長補佐
ク	米 山 博 章	ク 係長
ク	三 沢 真知子	ク 主事

発掘調査団

団 長	友 野 良 一	日本考古学协会会员
副 団 長	根 津 清 志	長野県考古学会会員
ク	御子柴 泰 正	ク
調 査 員	坂 塚 政 美	ク
ク	田 畑 長 雄	ク
ク	福 沢 幸 一	ク
調査補助員	原 修 一	
ク	池 上 大 二	

第3節 発掘日誌

昭和53年6月15日 発掘器材（テント、あるいはスコップ、ショレン、箕）等々をトラックにて発掘現場へ運搬する。発掘器材の量が多いために、つけおろしにかなりの時間を費やしたあと、発掘地点が畑の中だったので、その場所まで車が入らないので、人手で運搬する。

昭和53年6月16日 発掘器材を運搬して、その地を整地し、テントを2張り建てる。テントを建てる場所はできるだけ人家の近い方へ建て、飲料水の運搬に便利を期す。

昭和53年6月17日 現況が蒸烟であったために柔の木をバーベコーン機で抜いてもらう作業員達は発掘予定地に雜草、茅が繁茂していたので、それを整理する。

昭和53年6月19日 本日も発掘面積が多い場所なので、一昨日、同様の仕事を行なう。日一日と暑さが、増し、夏へ近づいているようであった。

昭和53年6月20日 本日は現場へブルトーナーを入れて耕土剥ぎを実施し、夕方までかかって、その作業を実施する。作業員達は耕土の深さを確認するためにところどころヘグリット掘りをする。

昭和53年6月21日 本日よりグリットを設定する。グリットの名称は西から東A～K、南から北1～25と決め、一辺を2m×2m、面積4m²と決める。畑の土手や、各種の問題があって、規則的なグリットの掘り方はできなかった。第3図の遺構配置図に記載してある箇所は全面発掘をした。

昭和53年6月22日 本日より本格的な発掘調査を開始してグリット掘りを南西のD2から掘り始める。掘り始めてみると縁石陶器片の出土がみられたので、全面発掘をこころがける。

昭和53年6月23日 グリット掘りを進めていくとJ3附近、F4附近に落ち込みがみられ、この落ち込みは直線状に走っており方形状のなる様相になってきたので、前のを第1号住居址、後のを第2号住居址と名付ける。

昭和53年6月24日 第1号住居址のプラン確認に全力を注ぎ込む。

昭和53年6月25日 第2号住居址のプラン確認に全力を注ぎ込む。

昭和53年6月27日 第1号住居址の掘り下げを開始する。本址の東側は



断面を残しての発掘

第Ⅱ章 発掘調査の経過

用地外のため発掘調査は不可能であった。

昭和53年6月28日 第1号住居址、第2号住居址の全面的な掘り下げを開始する。遺物の出土はかなりの量であった。

昭和53年6月29日 第1号住居址、第2号住居址の掘り下げを続行する。昨日同様、遺物の出土はかなりの量に達している。

昭和53年6月30日 第1号住居址、第2号住居址の全面的な発掘調査を終了する。両住居址とも平安時代の住居址であり、カマドの保存状態は極めて悪かった。

昭和53年7月1日 第1号住居址、第2号住居址の清掃及び、その写真撮影を終了する。写真撮影をする際に乾燥しすぎたので、水をまいて、写真的効果を良くするようつとめる。

昭和53年7月3日 本日はグリット掘りを北へ北へと進めていくと、F7～F9の範囲内に落ち込みがみられ、これも落ち込みが直線上に走り、方形状になっていた。これを第3号住居址とする。

昭和53年7月4日 本日はグリット掘りを北西の方へ進めていくと、A8～A12の用地一杯のところに直線上の落ち込みがみられ第4号住居址とする。相変らず、各グリットから多少なりとも遺物の出土がみられた。

昭和53年7月5日 本日は前日、一昨日検出された二軒の住居址のプラン確認に全力を注ぎ込む。第4号住居址は地主に頼んで本址の西側の住居址にかかる部分だけ、あとで埋め戻しをするという条件で掘らせてもらう。ばつばつ、つゆあけ宣言が出そうな状態になってきた。

昭和53年7月6日 ブルトーザーで全面的な耕土剥ぎをしてあったために、本日一日かかって、第3号住居址、及び第4号住居址の全面的なプラン把握ができた。

昭和53年7月7日 本日より、第3、4号住居址の掘り下げを開始する。二つの住居址は割合に大きかったために、作業員達を大半分に分けて、それぞれに配分した。

昭和53年7月8日 第3号住居址、第4号住居址を掘り下げていくと、遺物の出土具合が顕著となり、第3号住居址からは縁石陶器片、第4号住居址からは鉄鏃、吸子、鉄滓等々、極めて出土例の少ない遺物の発見をみた。縁石陶器は一般的に考えられているのではかなり高貴な人々の祭祀用



ヤリ型を組んでの発掘

具として使用された場合が多い。吹子の出土は製鉄場的な色彩が強いように思われるが断定はできない。

昭和53年7月10日 第3号住居址、第4号住居址の掘り下げをつづける。第3号住居址からは縄糸陶器片の出土がしばしばであった。

昭和53年7月11日 本日は第3号住居址、第4号住居址の完掘を終了する。それによると両住居址とも平安時代である。第3号住居址のカマドは西側、第4号住居址は東側にあった。特

に、第3号住居址は注目すべき住居址であったために、ヤリ方を組んで掘り下げる。第3号住居址第4号住居址の清掃及び写真撮影を終了する。

昭和53年7月12日 本日から発掘地区的北あるいは西の地区を全面的にグリット掘りを実施していくと、第3号住居址の北東の一角に落ち込みがみられ、第5号住居址とする。

昭和53年7月13日 本日は第4号住居址の北側の一帯のグリット掘りを実施してみると、方形状の落ち込みがみられ、第6号住居址とする。本址は西側は用地外で発掘不可能であった。

昭和53年7月14日 第5号住居址の北東の一帯のグリット掘りを進めていくと住居址がみつかり、第7号住居址とする。

昭和53年7月15日 第7号住居址の北西の一帯のグリット掘りを実施していると、方形状の落ち込みがみられ、第8号住居址とする。

昭和53年7月17日 第8号住居址の北東の一帯のグリット掘りを進めていくと住居址がみつかり、第9号住居址とする。

昭和53年7月18日 本日は第9号住居址の西側に落ち込みがみられ、第10号住居址とする。本日をもって、大般、当初計画した当掘地区的全面的な試掘を終了する。

昭和53年7月19日 第5号住居址のプラン確認をする。そのために周囲を扒覆していくと各種の落ち込みがみられ、また切り合い関係になっていた。第5号住居址の東側を第11号住居址、北側を第12号住居址、第13号住居址とする。

昭和53年7月20日 本日、午前中一杯かかって、前日の5軒の住居址のプラン確認を終了する。午後は、全作業員達を投入して掘り下げを開始する。

昭和53年7月21日 5軒の住居址は一日中かかって、ほぼ、その全貌をとらえることができた。遺物の出土量は少なかった。また切り合い関係も大般把握できた。それによると第5号住居址が最も古く、次に第11号住居址、第13号住居址、第12号住居址の順になる。従って第12号住居址が最も新しい理屈になる。

昭和53年7月22日 第5号住居址、第11号住居址、第12号住居址、第13号住居址の完掘を終え、



丁寧に住居址を掘り下げる

第二章 発掘調査の経過

消掃をして、写真撮影を済せる。

昭和53年7月24日 第6号住居址、第7号住居址のプラン確認をするとともに、掘り下げを開始する。

昭和53年7月25日 第6号住居址、第7号住居址の全面的な掘り下げを終了する。2軒とも平安時代の住居址であった。

昭和53年7月26日 第7号住居址、第8号住居址のプラン確認をするとともに、掘り下げを開始する。

昭和53年7月27日 第7号住居址、第8号住居址の全面的な掘り下げを終了する。2軒とも平安時代の住居址であった。

昭和53年7月28日 第9号住居址、第10号住居址のプラン確認をするとともに、掘り下げを開始する。

昭和53年7月29日 第9号住居址、第10号住居址の全面的な掘り下げを終了する。2軒とも平安時代の住居址であった。

昭和53年7月31日 第6号住居址、第7号住居址、第8号住居址、第9号住居址、第10号住居址の清掃を終え、各住居址の写真撮影並びに発掘全域の写真撮影を済せる。

昭和53年8月1日 第1号住居址、第2号住居址、第3号住居址の平面及び断面実測、カマドのカツティングを終了する。

第3号住居址、第4号住居址、第5号住居址、第11号住居址、第12号住居址、第13号住居址の平面及び断面実測、カマドのカツティングを終了する。

昭和53年8月2日 第6号住居址、第7号住居址、第8号住居址の平面及び断面実測、カマドのカツティングを終了する。第9号住居址、第10号住居址の平面及び断面実測、カマドのカツティングを終了する。全測図の作製、最後の日となったので、発掘器材の水洗い、点検及び運搬をする。

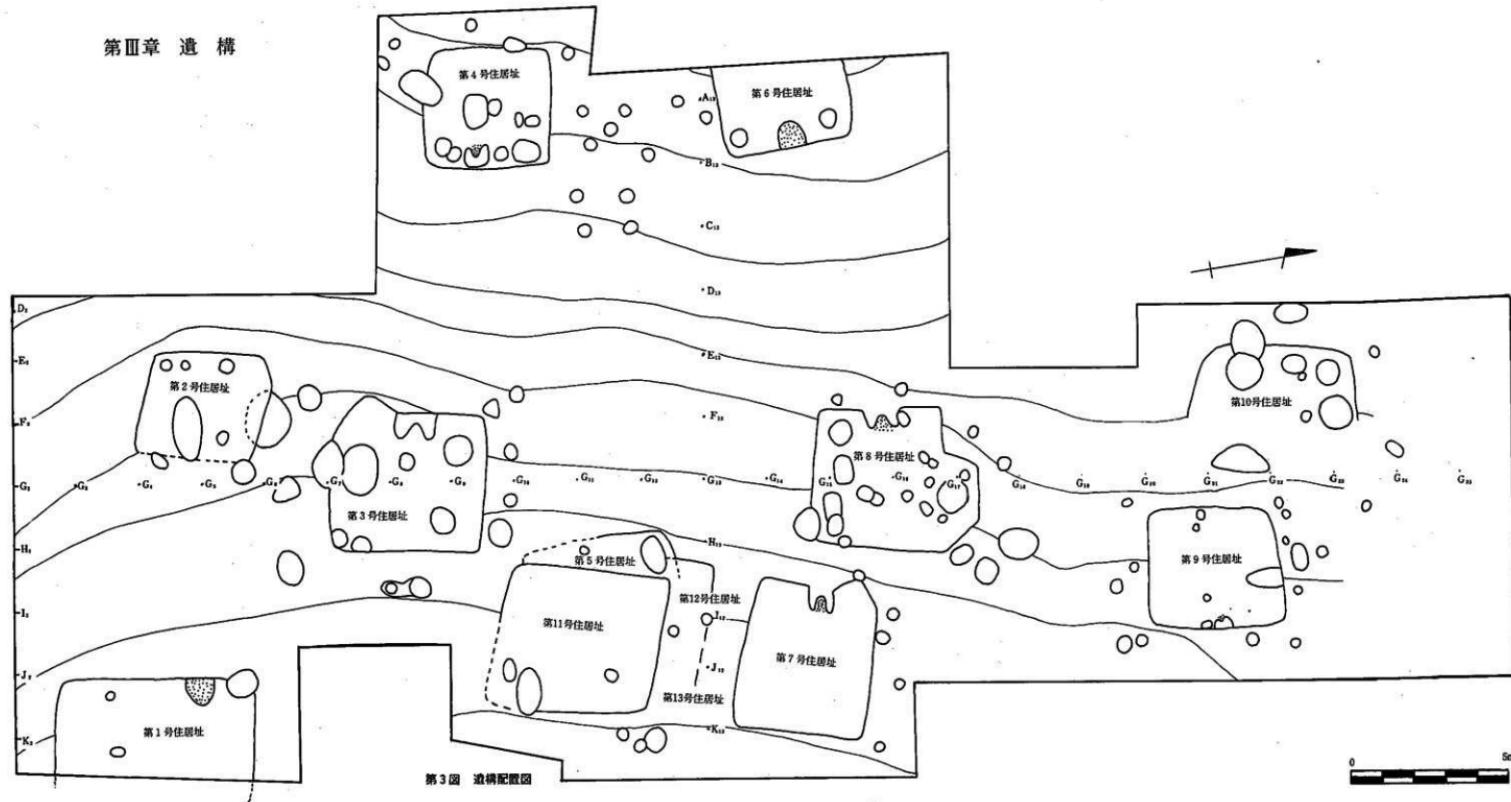
昭和53年8月～昭和54年2月 報告書作製のための資料整理及び原稿執筆。

昭和54年3月 報告書を印刷所へ送る。

昭和54年3月 報告書を刊行する。

(飯塚 政美)

第Ⅲ章 遺構



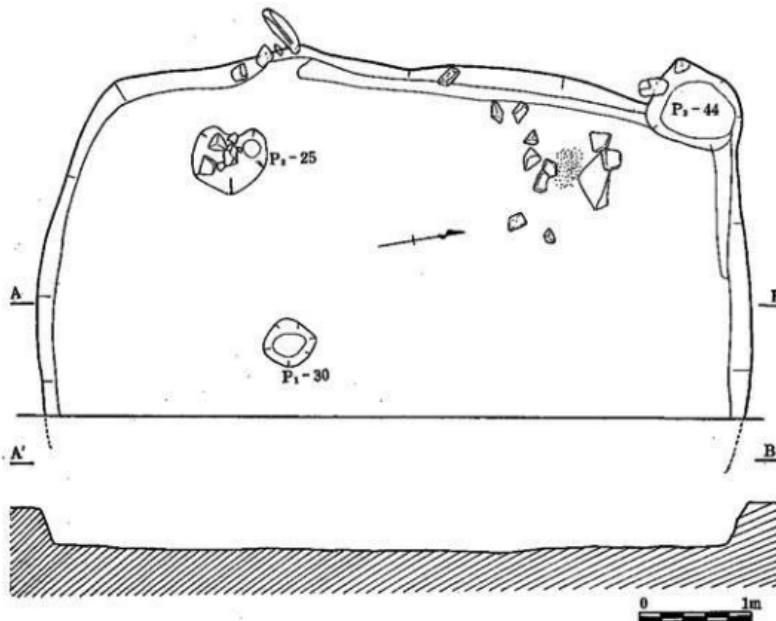
第1節 住居址

第1号住居址（第4図、図版3）

本址は発掘地区の最南東部に位置して発見され、礫混じりの暗褐色土を掘り込んで構築された堅穴住居址である。平面プランは隅丸長方形を呈する形態を成し、規模は南北6m40cm、東西は（東側は用地外のために発掘不可能であったためにその規模は不明）推定するに、南北の規模と同程度と思われる。

柱穴は現在のところでは3ヶ所検出されたが、全面発掘をすれば4～5本程度は検出されると思われる。柱穴のなかにはP₁のように小礫を配していたもの認められた。

壁高は40cm前後を計り、外傾気味で、わずかに壁面に凹凸が認められた。床面は凡むね平坦で、黄緑色粘土質層中に設けられ、固くたたいてあった。また西壁の北側から北壁の西半分にかけて周溝状の落ち込みが発見された。カマドは西壁北寄りの位置に発見され、石組粘土カマドと思われるが、完全に崩落しており、わずかに若干の石と焼土が残存しているのみであった。遺物は土師器、須恵器、灰釉陶器、綠釉陶器の出土があった。よって本址は平安時代の住居址と思われる。



第4図 第1号住居址実測図

第2号住居址（第5図、図版3）

本址は発掘地区的南西の一隅に、F 3～F 5, E 3～E 5, D 3～D 5の9グリット内にはさまるようにして発見された。砂礫混じりの暗褐色土を掘り込んで構築された竪穴住居址である。平面プランは隅丸方形を成し、その規模は南北 3m80cm, 東西 3m40cm 程を測る。ピットは9カ所発見され、そのうち主柱穴と成り得るのは P₁, P₂, P₃, P₄ と思われる。壁高は基盤が西から東への傾斜のために西側は高く、東側はほとんど残存していないかった。壁面の凹凸は少なく、外傾気味であった。

カマドは完全な型での発見はのぞめなかった。カマドらしきものは南東の隅に発見されたわずかな焼土と袖石らしきものが残存していた。

床面上には、かなりの数の礫が集中しており、また P₁ のように本住居址を切っているようなものも検出された。床面の状態はかなり荒れており、かなりタタキになつてはいるものの、凹凸は頗著であった。

遺物は土

師器の壺

坏、灰陶陶

器の碗、皿

が出土して

いる。須恵

器の出土例

は一点もみ

られなかっ

た。

本住居址

の時代判定

は灰陶陶器

の出土例か

ら察して平

安時代と思

われる。

遺物のなか

で綠釉陶器

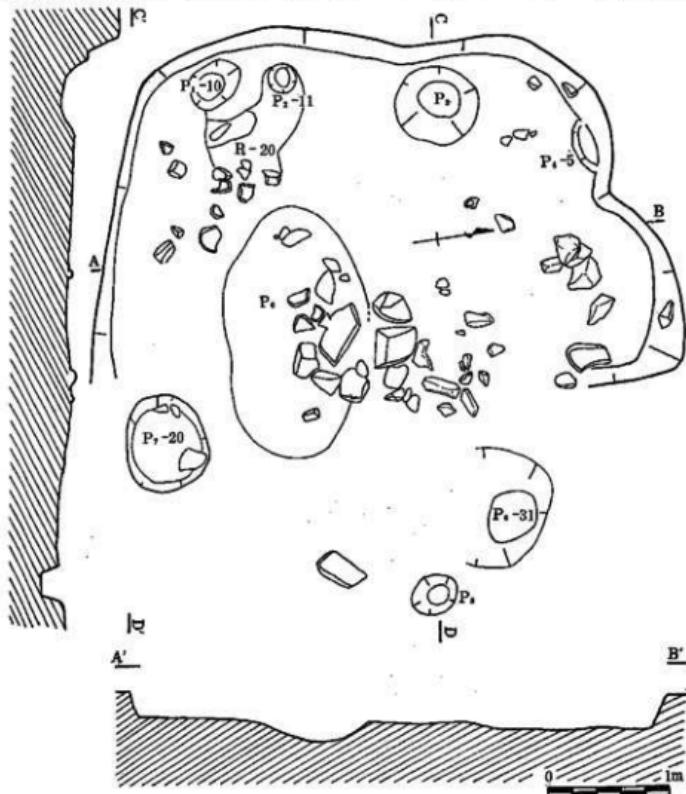
の出土例が

1点もなか

ったことは

何か意味深

く思われる。

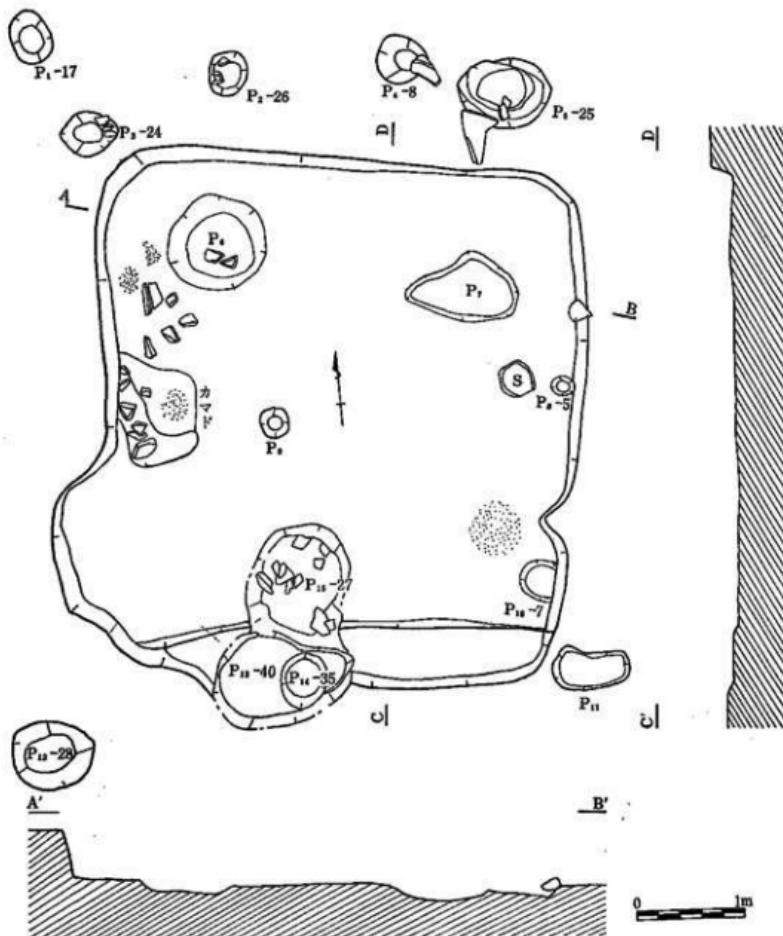


第5図 第2号住居址実測図

第3号住居址（第6～7図、図版4）

本址は南西に第2号住居址、北東に第5号住居址が近接した位置に発見され、砂礫混じりの暗褐色土層を掘り込んで構築された竪穴住居址である。平面プランは隅丸長方形を成し、その規模は南北4m90cm、東西4m40cm程を測る。

ピットは住居址内及び壁外に合せて15カ所発見されたが、住居址内のP₆、P₇は主柱穴となり得るが、他は本址に附属するかどうかの確証は得られなかった。壁高は10cm～45cm内外を測定で



第6図 第3号住居址実測図

第Ⅲ章 遺 塚

き、壁面は大般平坦であった。西壁は垂直に近いが、他は外傾気味であった。

床面は小礫混入のかなりがさついた感じの様相を呈し、全般的に軟弱なものであった。カマドは西壁中央に位置し、石芯粘土カマドであるが、大半が崩落していた。

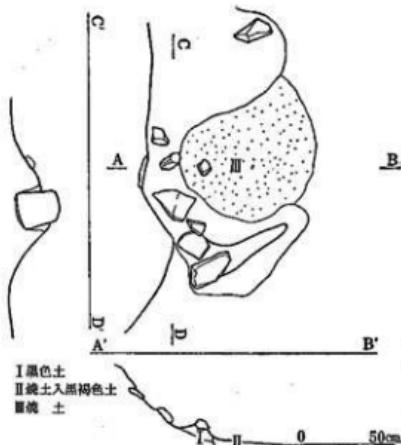
遺物は土師器、灰釉陶器、綠釉陶器が出土している。よって本址は平安時代の住居址と思われる。
（田畠 民雄）

第4号住居址（第8～9図、図版4）

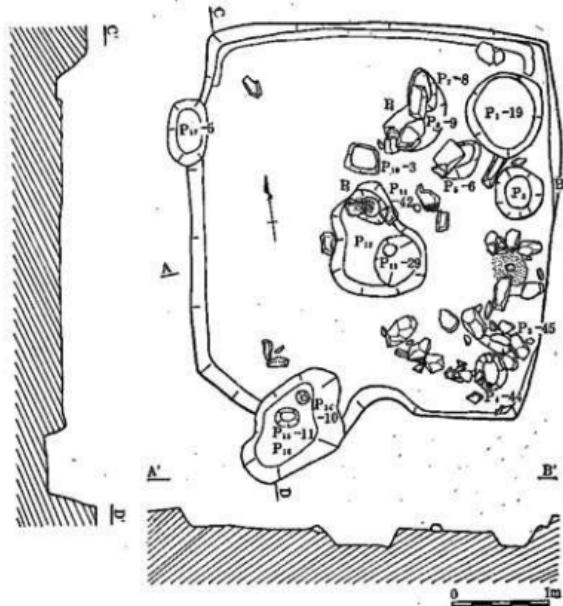
本址は発掘地区的最西端部に位置して発見された。当初は発掘用地外であったが掘り下げていく段階で期待のもとてそのような住居址となってきたので、地主様に頼んで西側の部分を掘らせてもらうことにし

た。砂礫混じりの暗褐色土層を掘り込んで構築され、隅丸方形の平面プランを呈する竪穴住居址である。規模は南北4m10cm、東西3m90cm前後を測り、この時代の住居址としては一般的であった。

ピットは全部で17ヵ所検出されたが、床面上に複雑混然とした配列をしているためにどれが主柱穴になるかは不明である。ただ、これらのうちには焼土と木炭も含まれているのもみられた。壁高は20cmから50cm程度を測り、状態としては外傾が強く、壁面の凹凸がわ



第7図 第3号住居址カマド実測図



第8図 第4号住居址実測図

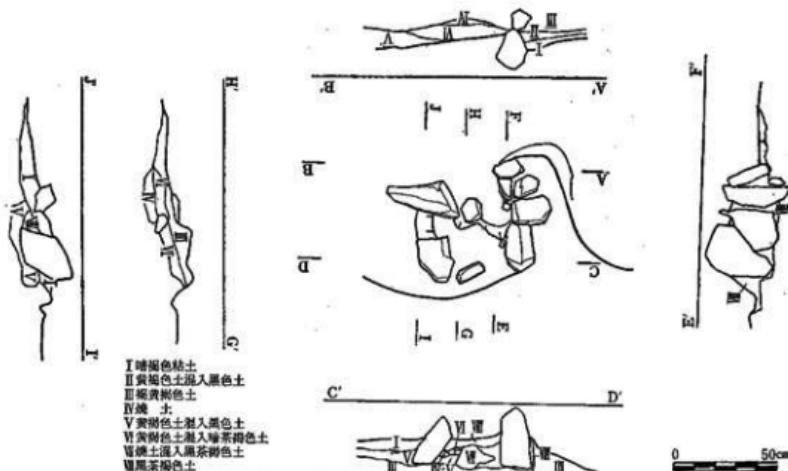
ずかにあった。

床面はわずかな凹凸が認められ、かたいタタキとなっていた。同面上には多くの石がみられ、これらの石のなかには加工されていたものも認められた。カマドは東壁中央やや北寄りに位置し、構築当時は石組粘土カマドであったと思われるが、現在はその芯になる石だけが残存している。覆土中より多量の焼土と木炭の検出がみられ、何か注目してよさそうな要素をもっている。

遺物は鉄鋤、吹子、鐵鎌、土師器、須恵器、灰釉陶器が出土している。よって平安時代に位置づけできそうな竪穴住居址であり、かつまた、たたら製鉄址的な良いのする遺構と思われる。

土師器では壺・杯などの破片が出土しており、壺の胴部にカキ目痕のものとヘラ整形のものとがみられる。

灰釉陶器では碗が多く緻密な胎土をもつものである。



第9図 第4号住居址カマド実測図

第5・11・12・13住居址（第10図、図版5、7）

本住居址群はともに切り合ひ関係になっており、第11号住居址を第13号住居址が切り、第13号住居址を第12号住居址が切っている。第5号住居址は第11号住居址、第12号住居址、第13号住居址にそれぞれ切られている。従って新旧関係は第5号住居址が最も古く、次に第11号住居址、第13号住居址、第12号住居址の順になる。用するに第12号住居址が一番新しい。これらを如何なる理由から住居址として扱かったかというと一応方形状の落ち込みが認められたために、住居址の遺構と考えた。四住居址はともに砂礫混じりの暗褐色土層を掘り込んで構築され、プランは切り合いで、現在は不明ではあるが、構築当時は隅丸方形状の竪穴住居址であったことが推測できよう。

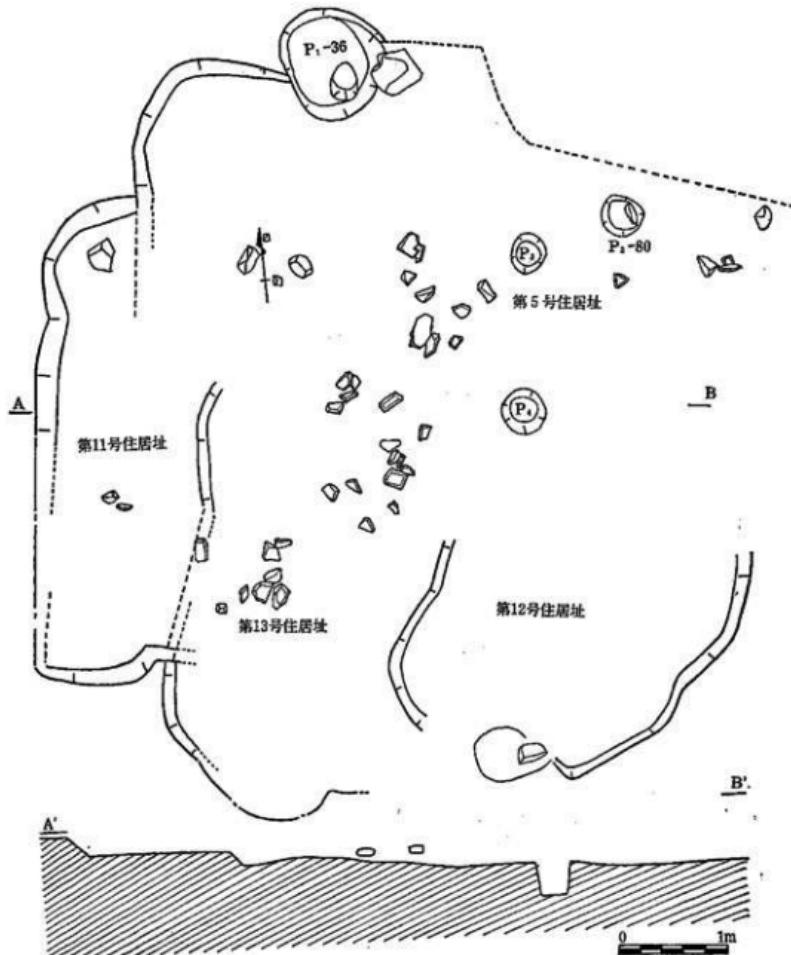
覆土中には多量の集疊が認められた。床面はともに軟弱であり、柱穴、カマド等の確認はできな

かった。

遺物はどのものが、どの造構につくのかの的確な區別は出来なかった。土師器、灰陶器が出土しているが、いずれも小破片で、少量出土しているのみである。とくに、これといって目をひく出土遺物はなかった。

ただ、以上の出土遺物より考えてみて、4つの住居址は若干の時代差はあるにしても全て平安時代の住居址と考えてよからうと思われる。

(田畠 辰雄)



第10図 第5・11・12・13号住居址実測図

第6号住居址（第11図、図版5）

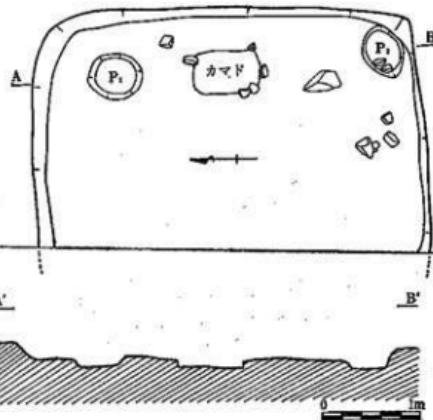
本址は発掘地区の最西端、及び第4号住居址の北側に発見され、疎混じりの暗褐色土を掘り込んで構築された竪穴住居址である。平面プランは（西側が用地外であったために発掘調査は不可能な状態であったが、掘られた部分から推して）隅丸方形状を成しているものと思われる。規模は南北4m20cm、東西は前述した理由により不明ではあるが、推測するに大體、南北の規模と近似値を示すものと思われる。

ピットは現在は2カ所検出されたが、西側を掘ればもう2本発見され、四本主柱穴の配列を成す、標準的な住居址となると思われる。

壁高は低く、内湾気味であり、壁面は割合にして平坦であった。

床面は黄褐色粘土層中に構築され、平坦で軟弱であった。同面上に点在する石は大部分密着あるいはくいこんで発見された。

遺物の出土量は少なかった。内容的には土師器、灰釉陶器が出土しており、よって、本址は平安時代の住居址と思われる。住居址の全面的な発掘ができれば、さらに優品が出土したかも知り得ない。



第11図 第6号住居址実測図

第7号住居址（第12～13図、図版6）

本址は南側で第5号住居址、第11号住居址、第12号住居址、第13号住居址、北西で第8号住居址にはさまれた位置に発見された。疎混じりの暗褐色土を掘り込んで構築された竪穴住居址である。平面プランは多少の出張りはあったが、全般的みてみると隅丸長方形を呈し、その規模は南北4m10cm、東西4m80cm程度を測定可能であった。

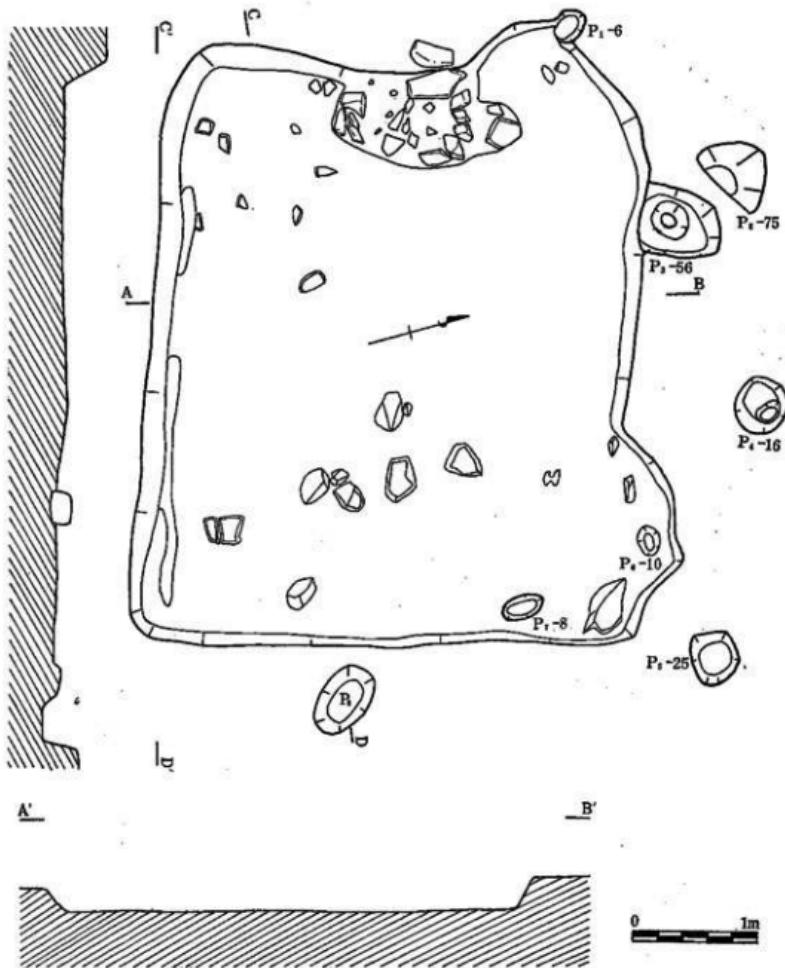
ピットは8カ所発見されたが、主柱穴と成りそうものは壁外に存在するのが、それに該当するとと思われる。南壁の周辺にピットが検出されなかったのは何の意味を成すものであろう。

壁高は25cm～40cm前後を計り、壁面は平坦で、外傾気味であった。状態は壁としては割合に保存状態は良好であった。床面は平坦で軟弱な部分が多く認められた。

カマドは西壁中央に位置し、石芯粘土カマドで、保存状態はかなり良好であった。

遺物は土師器、灰釉陶器が出土している。出土遺物は覆土中層から下層にかけて集中していた。土師器では甕の口縁部破片、杯の底部等が出土している。灰釉陶器では壺、碗、皿の小片が出土している。

本住居址の時代決定は先に述べた遺物より平安時代の住居址と考えられる。



第12図 第7号住居址実測図

第8号住居址（第14～15図、図版11）

本址は東側で第7号住居址、北東で第9号住居址、北西で第10号住居址にはさまれた位置に発見された。砂疊混じりの暗褐色土層を掘り込んで構築された竪穴住居址である。平面プランは、ところどころでこぶ状にとび出しているが全般的には隅丸方形形状を形成している。規模は南北4m 20cm、東西4m程を測っている。

ピットは22カ所検出されたが、配列位置が極めて複雑多岐で、その主柱穴は把握できなかった。

壁面は外傾が強く、大般平坦となっていた。床面はやや凹凸があり、小礫が混入していた。カマドは西壁中央部附近にあり、石芯粘土カマドの組成を成し、その保存状態は極めて良好であった。

遺物は土師器、須恵器、灰釉陶器がそれぞれ出土した。従って本址は平安時代に位置づけが可能と思われる。

第9号住居址（第16図、図版6）

本址は北西の位置に第10号住居址がみえる位置に発見され、砂礫混じりの暗褐色土層を掘り込んで構築された竪穴住居である。平面プランは隅丸方形を成してはいるが、壁の周囲にところどころくぼんだり、出張ったりした個所が認められる。規模は南北4m20cm、東西3m90cm程を測る。

ピットは18カ所発見され、そのうち主柱穴あるいは補助穴となり得えそうなのは、壁内では P_{10} 、 P_{12} 、 P_{13} 、 P_{14} 、 P_{15} 、南壁の壁外では P_{11} 、 P_{16} 、 P_{17} 、北壁では P_1 、 P_2 、 P_3 、 P_4 であろう。特に壁内のピットは何か間切り的な意図の現われであろうか。

壁高は40~50cm位を計り、割合に深かった。西壁の状態は外寄し、凹凸は少ない。東壁は外傾し、わずかに凹凸あり、南壁は外傾し、わずかに凹凸あり、北壁はわずかに外寄し、凹凸は少なかった。

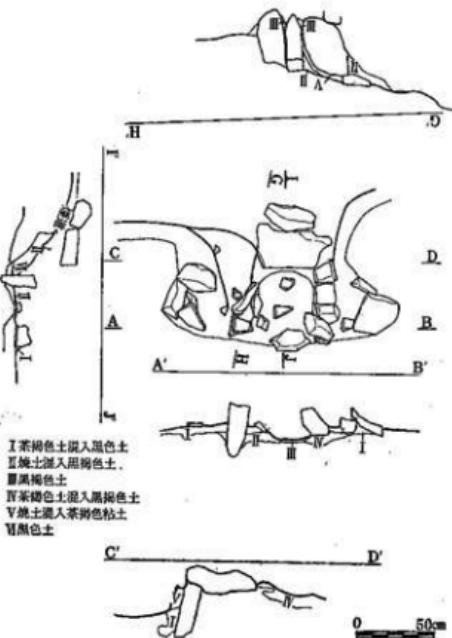
床面は黄緑色粘土質層面に構築され、軟弱を成し、状態は全般的に悪かった。北壁の近くに集石が認められた。

カマドは東壁中央部附近と思われるところに位置し、石芯粘土カマドであって、保存状態は極めて悪かった。

遺物は土師器、須恵器、灰釉陶器が出土している。よって本址は平安時代に位置づけが可能であろう。

第10号住居址（第17図、図版7）

本址は発掘地区の最北端部に位置して発見された。掘り込み面が割合に浅かったので、甌の上面



第13図 第7号住居址カマド実測図

は多少なりとも破壊したケースがあったような思われた。掘り込み土層は砂礫混じりの暗褐色土を掘り込み、北壁の東半部と東壁の全部は残存していないが、残った部分から推測して隅丸方形を成している。

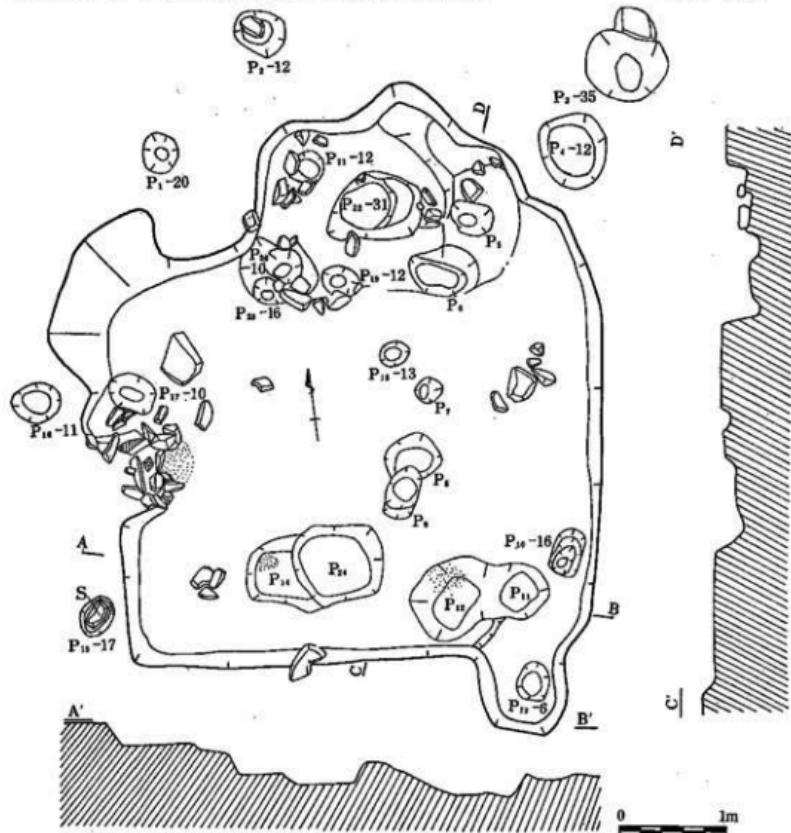
ピットは全部で14ヵ所発見されたが主柱穴となりそうなのは明確化できない。

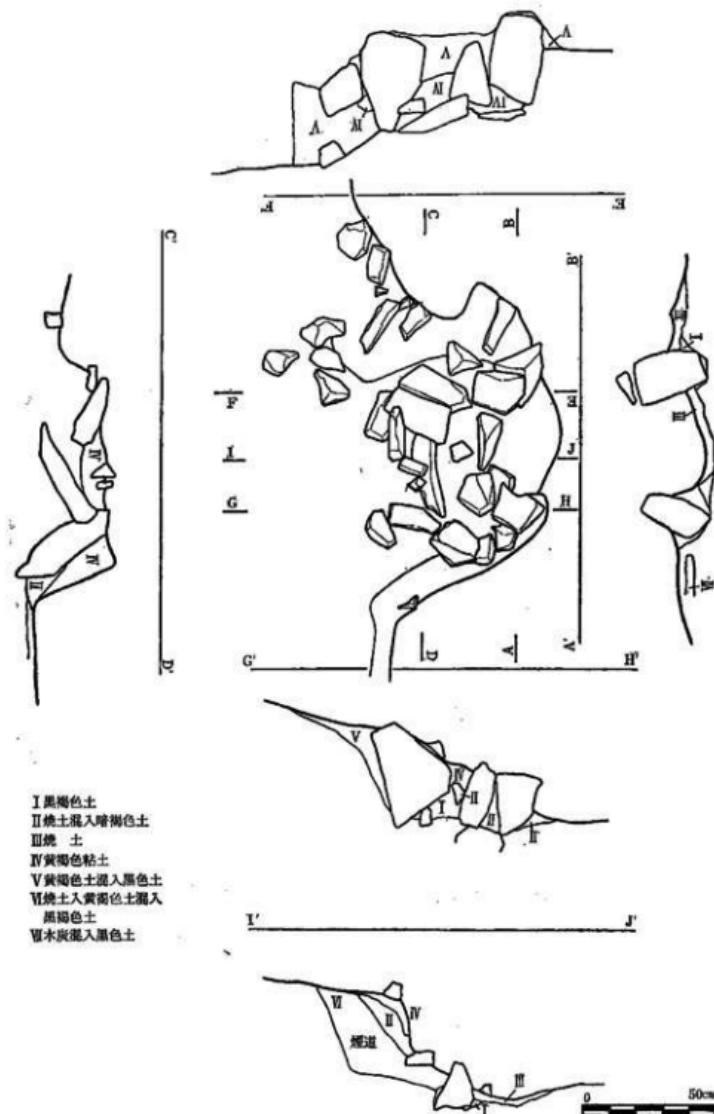
壁は残存している部分より、高さは10~40cm程度、その状態は外傾気味で、凹凸は少ない。

床面は大體水平で、かたいタタキとなっていた。住居址の構築時にはカマドは存在していたと思われるが、現在はその面影すら確認できなかった。おそらく石芯粘土カマドであっただろう。

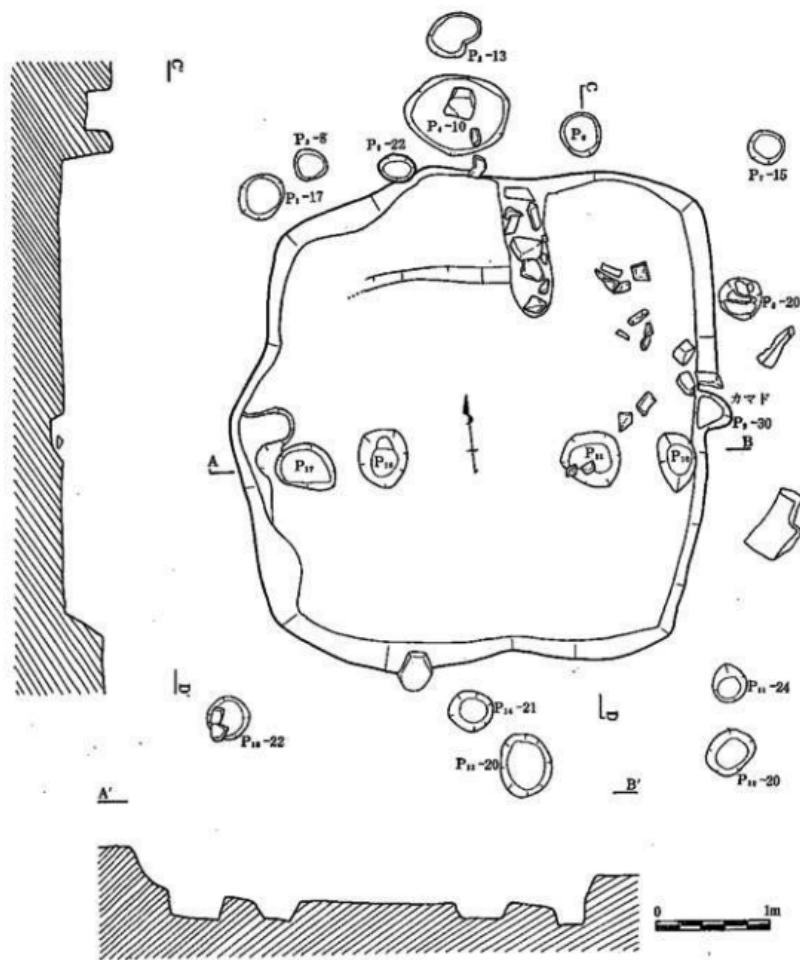
遺物は全体的に出土量は少なく、土器類、須恵器、灰釉陶器が出土している。すべて小破片である。土器類では甕の胴部片、坏の破片か、須恵器では甕の胴部片、灰釉陶器では碗、皿の破片等が出土している。よって本址は平安時代の住居址と思われる。

(田畠 十雄)

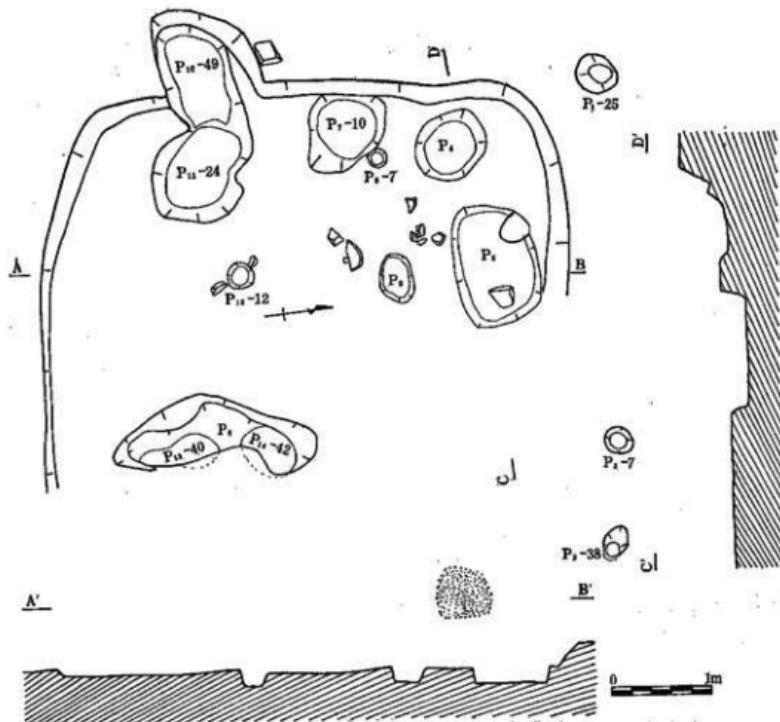




第15図 第8号住居址カマド実測図



第16図 第9号住居址実測図



第17図 第10号住居址実測図

第IV章 遺 物

第1節 住居址内出土遺物

第1項 第1号住居址

土師器、須恵器、灰釉陶器、綠釉陶器が出土しており、灰釉陶器の量が多めであった。

遺物は覆土上層に多く発見された。また綠釉陶器片は覆土最上層の出土であり、ほとんどが小破片であった。

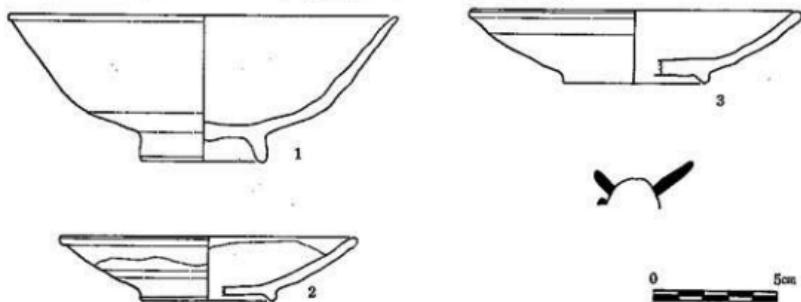
土師器では粗いカキ目痕のある甕の副部片

壺形土器では内面黒色のものと、そうでないものがあり、高台付のものも出土している。全体に土師器の量は少ない。

第1章 遺 物

須恵器の出土はほとんどなく、わずかに壺の胴部が出土しているにとどまった。

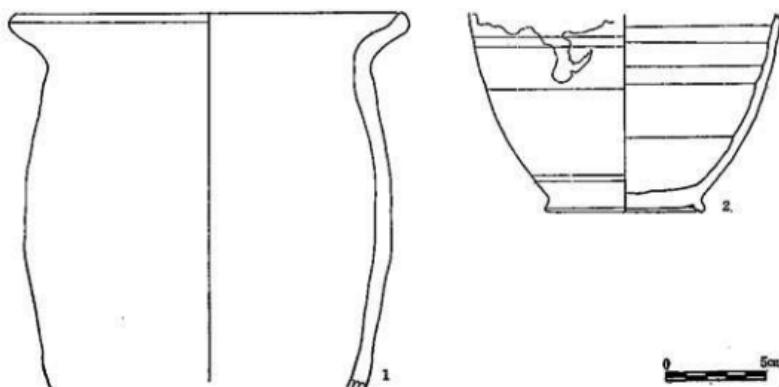
灰釉陶器の出土量が一番多く、碗（第18図1）と段皿（第18図2～3）が出土している。ほとんどが青白灰色の釉がかかっており、東濃系産のものがほとんどであった。



第18図 第1号住居址出土遺物実測図

第2項 第2号住居址

遺物の出土量は少なく、土師器では、口縁部にヨコナデ、胴部はヘラ削りのされている甕が数個体、杯は10個体であった。灰釉陶器は碗が2個体、皿が2個体出土している。須恵器の出土はみられなかった。第19図の1は土師器の甕、同図の2は灰釉陶器の壺である。



第19図 第2号住居址出土遺物実測図

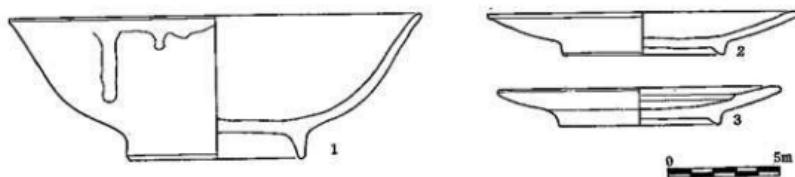
第3項 第3号住居址

土師器、灰釉陶器、綠釉陶器が出土している。土師器では、胴部にヘラナデされている小形の甕が5個体程と、杯では内面黒色のものが多く、数個体出土している。

灰釉陶器では碗が6個体、皿が3個体ほど出土しているが、どれも小破片であるが、緻密な胎土

をどれもがもっている。

第20図の1は灰釉陶器の壺。同図の(2~3)は灰釉陶器の皿である。

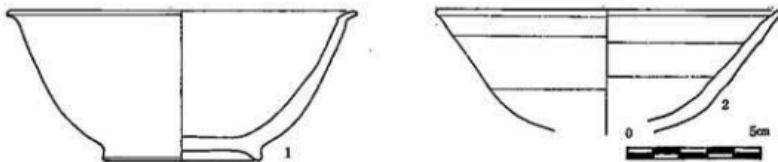


第20図 第3号住居址出土遺物実測図

第4項 第5・6号住居址

第21図の1は第5号住居址出土の灰釉陶器の壺である。第6号住居址は土師器と灰釉陶器が出土しているが、量は少なく小破片のみである。

土師器では、内黒の壺、甕が、灰釉陶器では壺がそれぞれ出土している。第21図の2は第6号住居址出土の土師器の壺である。



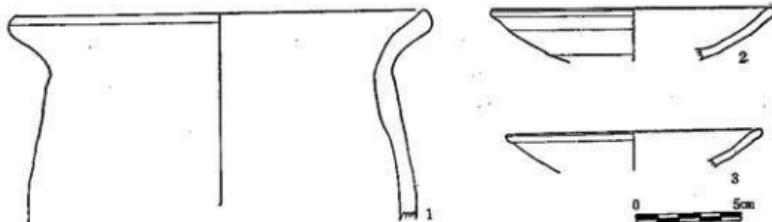
第21図 第5・6住居址出土遺物実測図

第5項 第8号住居址

土師器、須恵器、灰釉陶器がそれぞれ出土している。土師器では、甕、壺が出土しており、甕は側部のヘラ削りのものと、カキ目のものがあり、壺は内面黒色のものである。

灰釉陶器では皿が、須恵器では壺がそれぞれ出土している。

第22図の1は土師器の甕、同図の(2~3)は土師器の壺であろう。



第22図 第8号住居址出土遺物実測図

第6項 第9号住居址

土師器と須恵器、灰釉陶器が出土しているが、出土量はそれほど多くなく、小破片のみであった。土師器では壺、坏が出土しており、壺は粗いカキ目痕のもの、坏は粗雑な胎土のものである。

須恵器の量が他の住居址と比して多く目につき、皿、坏が出土している。第23図の1は土師器の坏、同図の2は須恵器の杯である。

(田畠 良雄)



第23図 第9号住居址出土遺物実測図

第2節 緑釉陶器

伊那市金鉢場遺跡出土の緑釉陶器。本遺跡発見の緑釉陶器は皿と平碗の二種類で、個体数は11個体分と考えられる。

1 (第24図-1) は直径11.8cm、底径6.3cm、高さ2.2cm、口縁はやや外反、高台はわずかに開きぎみの付高台、底部の削は中心より外周へ向ってロクロ回転を利用しながら削られている。釉は底部以外は全面に施され、色調は濃い緑色である。皿の五分の一は欠損、素地は灰黒色の細緻の陶土を用い、焼成温度が低いため、口縁部の釉が磨耗している重焼の痕が見受けられるところ、量産が行われる時期と考えられる。

2 (第24図-2) は直径11.7cm、底径5.6cm、高さ1.95cm、高台はわずか内曲きみ付高台、底部は中心から外周へむかってロクロ回転を利用しながら削られている手法は1と同様である。胎土は良質の灰黒色の土を用い、釉は底部を除いて、全面に美しい緑色釉がかけられている。一部に釉の磨耗がうかがえる。

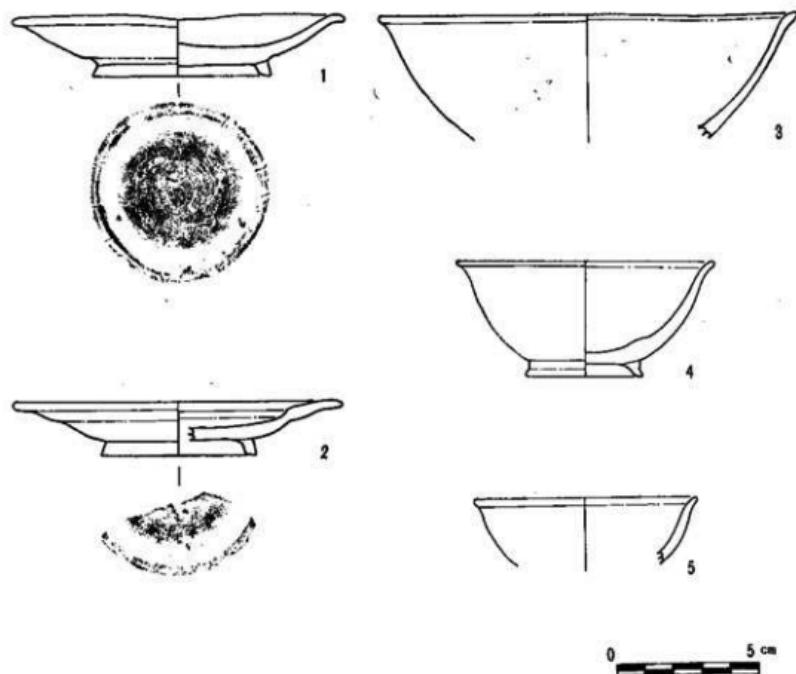
3 (第24図-3) は碗の破片である。口径は14.8cm、器厚3mm、口縁はわずか外反ぎみ、器面以外にはロクロ痕が窺える。胎土は灰褐色、口唇部は釉が剥落している。

4 (第24図-4) は小形の碗である。直径9.1cm、底径4.2cm、高さ4.1cm、高台は付高台、高台の端は外反している。釉は器面全体に施され、胎土は赤褐色焼成は良好である。口径は高台に比して2.1:1と深い。この傾向は時期的に下ることを示している基準にもなる。

5 (第24図-5) は4より更に小形の碗の破片である。復原口径は8.0cm、口縁部は外反している。胎土は4と同じ陶土を用いている。焼成は良好、釉は灰緑色で器面に磨耗が見受けられる。

その他金鉢場3住から出土した緑釉破片のうち、調査番号No-100は、白色の柔かい胎土での緑釉陶器である。器形は碗形と考えられるが、この種の胎土は当地方では初見である。そのほかの6個体分は釉調もほぼ同じであるところから、時期的には同じ頃のものと考えられる。(友野良一)

第2節 緑釉陶器



第24図 緑釉陶器実測図

第V章 まとめ

今回の調査結果については、以上述べてきたとおりである。発見された遺構は、平安時代の住居址13軒を調査した。

1. 金鉄場遺跡の位置は、長野県伊那市西箕輪羽広金鉄場地籍に所在する。
2. 本遺跡の所在する西箕輪は、経ヶ岳の東山麓の扇状地にあり、本遺跡のみではなく、多くの遺跡が分布する。その分布は第1図西箕輪地区遺跡分布図に示されているとおりである。これ等の遺跡の分布状況をみると、経ヶ岳に源を発する大泉川・大清水川の周辺と、その間にはさまれた山麓扇状地帯に多く集中していることが窺われる。これ等の内訳は旧石器時代・縄文中期・縄文後期・縄文晚期・弥生時代・古墳時代・奈良・平安時代・中世にいたるまで分布していることが知られるのである。現在の集落の立地も古代とまったく変わることに驚きの目を見張らざるを得ない。我々は今迄山麓地帯の遺跡に対して無関心な面が多かったが中央道埋蔵文化財の調査により山麓の遺跡が次第に明かになってきたことなど合せ、山麓地帯は旧石器と時期的には新しい弥生時代前期及び奈良・平安の重要な遺跡が分布することが明かになってきたことに大きな関心を寄せるものである。金鉄場遺跡もその一つである。
3. 平安時代の遺構について、今回調査された平安時代の住居址は13軒である。

遺構・遺物一覧表

番号	プラン	大きさ			カマド	出土遺物				
		東西m	南北m	深さcm		土師	須恵	灰釉	綠釉	鐵製品
1	隅丸長方形	6.4	40		石組粘土カマド	○	○	○	○	
2	隅丸方形	3.4	3.8	30	石組粘土カマド	○	○	○		
3	隅丸長方形	4.4	4.9	10~45	石組粘土カマド	○		○	○	
4	隅丸方形	3.9	4.1	20~50	石組粘土カマド	○	○	○		○
5										
6	隅丸方形	4.2	20		石組粘土カマド	○		○		
7	隅丸長方形	4.8	4.1	25~40	石組粘土カマド	○		○		
8	隅丸方形	4.0	4.2	40~60	石芯粘土カマド	○	○	○		
9	隅丸方形	3.9	4.2	40~50	石芯粘土カマド	○	○	○		
10	隅丸方形		5.0	10~40	石芯粘土カマド	○	○	○		
11										
12										切り合いで プラン不明
13										タ

本遺跡の住居址の大きさは第1号・10号が5~6mと大きいが、他は大方4~5m級の大きさの住居址である。平面プランは隅丸長方形が第1・3・7号住居址で他は隅丸方形である。カマドは、石組の粘土カマは第1・2・3・4・6・7号住居址、右芯粘土カマは第8・9・10号住居

址、第5・11・12・13号住居址は不明である。

出土遺物、土師器は第5・11・12・13号を除いて全住居址から出土している。須恵器は第1・2・4・8・9・10号住居址から出土、第3・6・7号住居址からは出土を見なかった。須恵器の出土する住居址と、出土しない住居址とが存在することは事実であるが、この取扱について問題であるが、今後の研究としたい。

縁釉陶器は、第1・3号住居址より出土した。第1号住居址出土の縁釉は小破片がわずかであつたが、第3号住居址からは21片6個体分と考えられる破片が発見された。この第3号住居址は他の住居址と特別変った所が認められない住居址であるが、おそらく本集落の特殊な位置にあったものかも知れない。今回の調査ではこれを裏付けるだけの資料は得られなかつたが、今後重要な問題として考えてゆきたい。本址発見の縁釉陶器は、伴出された灰釉陶器との比較よりK-90～0-53期の間に位置するものと考えられる。

灰釉陶器、第1号住居址（第18図-1）は口径と高さの比が2.5：1と口径に対して深目である。胎土は灰白色、釉調は光沢のある白色、高台の下半面が内傾しているところ東濃係池田窯の産、2：3と同様と考えられる。

第2号住居址（第19図-2）は灰釉陶器の壺、胎土は灰白色、コバルト色の釉が掛けられている。肩から腰にかけてゆるやかのカーブは尾北窯の壺によく見られるところである。1は土師器の甕で国分期に比定されるもの。

第3号住居址（第20図-1）は、灰釉陶器の碗である。胎土は灰白色、釉調は、淡緑色、刷塗り、高台は下半面が内傾して、尖端が尖っている。K-90以降と考えられる。窯は尾北と思われる。そのほか2・3も同じ窯の所産であろう。

第5号住居址（第21図-1）は灰釉陶器の碗、口径と高さの比が2.2：1と深いところ水田窯の比率に近い数値を示している。時期は0-53期と考えられる。

第9号住居址、灰釉陶器の皿、口径と高台の比が2：1、0-53期の時期のもの。

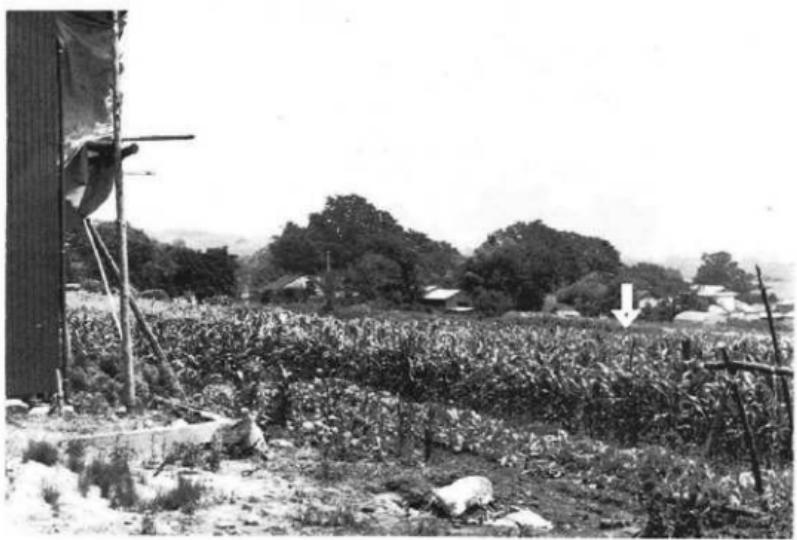
以上金鉄場遺跡出土の灰釉陶器について観察してきた結果、時期的にはK-90期～0-53期のものであることが明らかとなった。集落も第5・11・12・13号住居址の切合いで解る様に、1世紀四分の三期にわたって営まれたものと推定される。その外、第4号住居址から、鉄滓・吹子・鐵鎌等の遺物が集中して出土しているのは、製鉄址として考えたい持殊な遺構である。

本調査報告を終るにあたり、この調査について種々の御指導をいただいた県教委員会担当官各位、南信土地改良事務所の御好意に対し深い敬意を表する次第であります。（友野良一）

図 版



遺跡地を東側より眺む



遺跡地を南側より眺む



発掘地区を北側より眺む



発掘地区を南側より眺む



第1号住居址



第2号住居址



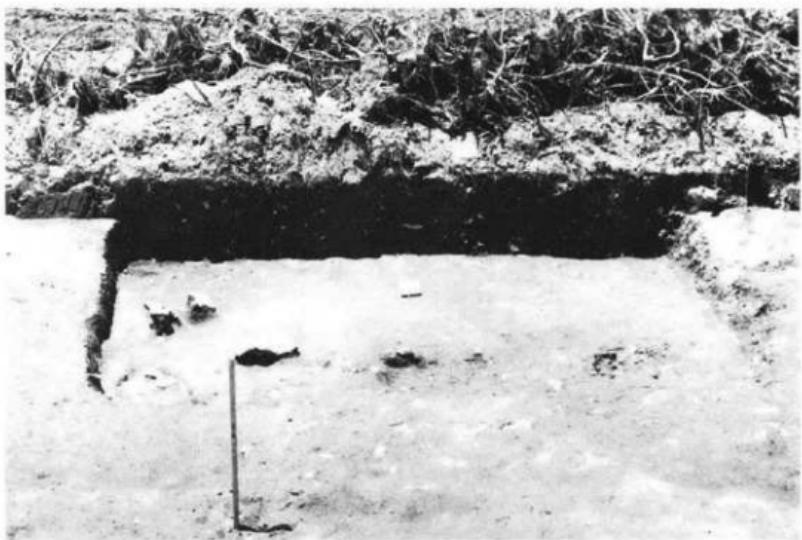
第3号住居址



第4号住居址



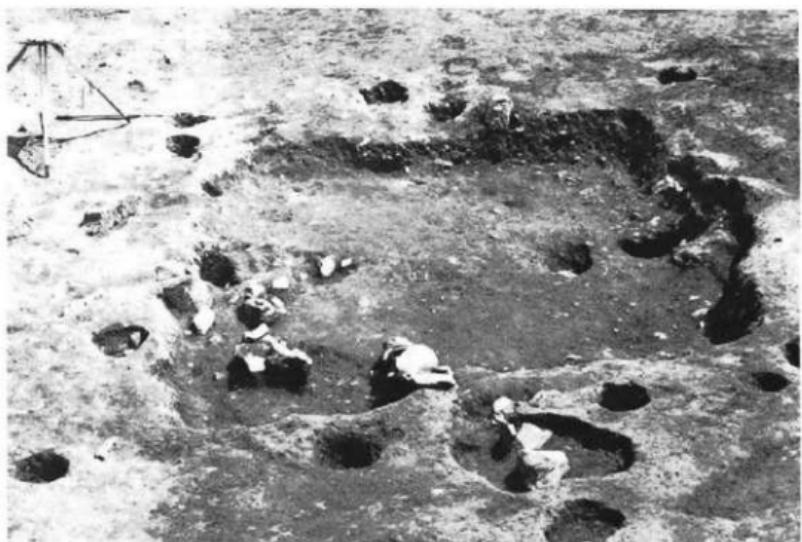
第5・11・13号住居址



第6号住居址



第7号住居址



第9号住居址



第10号住居址



第11・12・13号住居址



第3号住居址（東西）断面



第3号住居址（南北）断面



第1号住居址断面



住居址断面



第3号住居址力マド



第4号住居址力マド



第6号住居址力マド



第7号住居址カマド



第8号住居址カマド



第9号住居址カマド



第2号住居址遺物出土狀況



第3号住居址遺物出土狀況



第4號住居址遺物出土狀況



第4號住居址遺物出土狀況



綠釉陶器出土狀況



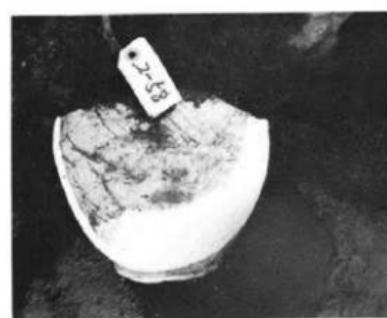
灰釉陶器出土狀況



灰釉陶器出土狀況



灰釉陶器出土狀況



灰釉陶器出土狀況



土師器出土狀況



土師器出土狀況



綠釉陶器出土狀況



綠釉陶器出土狀況



土師器出土狀況



須惠器出土狀況



土師器出土狀況



綠釉陶器出土狀況



灰釉陶器出土狀況



破子出土狀況



綠釉陶器出土狀況



綠釉陶器出土狀況



鋼鐵出土狀況

金鋳場遺跡

—緊急発掘調査報告—

昭和54年3月15日 印刷

昭和54年3月17日 発行

発行所 長野県伊那市教育委員会

印刷所 長野県長野市西和田 470

信毎書籍印刷株式会社

